

芸術創作の源泉としての自然——シェリング芸術哲学を手掛かりに

八幡さくら (一橋大学)

近代美学において、自然は芸術の表現対象としてのみならず、芸術創作に不可欠な要素のひとつとして論じられてきた。人間が技術を使って生み出す芸術作品と、そのモデルや創作の原動力となる自然との関係については、目覚ましい科学技術の発展が続く現代においてもなお関心を呼ぶテーマの一つであるといえよう。こうした自然と芸術の関係に光を当てて芸術を哲学的に論じたのが、ドイツ観念論の哲学者F・W・J・シェリング(1775–1854)である。彼は1800年前後に展開した自身の芸術哲学において、自然と技術の総合として芸術を捉え、芸術創作を支える重要な役割を自然に見出している。とりわけ1807年のミュンヘンでのアカデミー講演『造形芸術の自然に対する関係について』では、芸術の創造性を基礎づける自然の産出性は、「自然精神」(Naturgeist)と名づけられ、芸術家が模倣すべき産出性の源泉とみなされている。このような芸術において不可欠な自然の産出性という構想の背景には、シェリングの自然哲学がある。シェリングは自然を死んだ観察対象としてではなく、自然自身を生み出す生きた産出力そのものとして理解する。彼は自然概念に〈単なる所産としての自然〉と〈産出性としての自然〉の両面を読み込み、前者を「所産的自然」(natura naturata)、後者を「能産的自然」(natura naturans)と名づける。この「能産的自然」こそ、芸術の創造性の源泉として論じられる自然である。

ただし、芸術哲学に関する諸著作の中で、自然という概念は一貫して同義であるわけではなく、それが芸術の制作において果たす役割も異なりを見せる。例えば、精神と対比される自然、芸術において自由と統合される自然、芸術作品と比較される有機体、芸術家の意図を超えた没意識的なもの、「技術」(Kunst)と対比される自然の自由な恩恵によって備わっている「ポエジー」(Poesie)、芸術の表現対象としての自然、自然と精神を結ぶ「紐帯」(Band)としての自然精神、などがある。そのため、一見多義的に見えるこれらの自然概念を整理することによってはじめて、芸術制作の様々な場面での自然の働きが明らかになり、シェリングが捉えようとした芸術の源泉たるべき自然の産出性の内実を捉えることができる。

そこで本発表では、シェリング芸術哲学で論じられる自然概念を整理し、芸術において働く自然の役割を明瞭化することを試みる。まず、いかにして芸術家が自然と技術を一体化して芸術作品を生み出しているのかを、『超越論的観念論の体系』(1800)と講義『芸術哲学』(1802–1803, 1804–1805)の天才論から読み解く。そして、アカデミー講演の「自然精神」に着目して、芸術作品を創造する能力と自然を生み出す力がいかに関係しているのかを検証する。以上の議論を通して、芸術の諸段階で登場する自然は、少しずつ異なる役割を担いながらもそこに通底する、人間の意識を超えた芸術創作を支える産出性であると結論する。